

住人家族

—シェア居住における空間構成の研究と提案—

Sharing Life with Others

A Study on Spacial Construction in Share Dwelling

11123001 飯塚 るり子

主査 篠原聡子 教授

副査 定行まり子 教授

宮 晶子 准教授

シェア居住 シェアハウス 居住形態 一室空間性 居場所

SHARE DWELLING SHARE HOUSE SHAPE OF DWELLING UNIFIED SPATIALITY COMFORT PLACE

1 研究計画

1 研究背景

近年、家族でも恋人でもない、見ず知らずの他人と暮らす「シェア居住」という居住形式が20～30代の若者を中心に増加している。

2000年以降普及しはじめたインターネットにおけるソフトテクノロジーの著しい進化に伴い、国や人種を越えて、不特定多数の他人に対して発信する、これまでにないあたらしいコミュニケーションツールが誕生した。そのことによって「シェアメイト」と呼ばれる同居人の募集や、さまざまな条件があるシェア居住のなかから自分に合ったスタイルのものを容易に探すことが可能となり、シェア居住は急激に増加した。

当初は経済的な理由からシェア居住がおこなわれていたが、最近のシェアハウスは、プライバシーを重視するがゆえにセキュリティー管理が過剰におこなわれ、個々が分断されている集合住宅とは違い、人とのつながりや交流を自然発生させ、日常生活を豊かにすることを目的としたものが多い。

しかし一方で、そのシェア住居は既存住宅や寮を改修したものが多く、似たようなプランをしているものがほとんどであるのが現状である。

家族と暮らすかひとりで暮らすか、という選択以外に、「他人と暮らす」というあたらしい選択肢に対して、どのような空間を提案できるかが今後の住宅設計における課題である。

2 研究目的

本研究では、実際の住宅の提案をとおしてシェア居住に対応しうる、これまでとは異なる空間形式の可能性を明らかにし、シェア居住という住まい方のあらたな可能性を探ることを目的としている。

個人化が進み、家族形態やライフスタイルが多様化している社会背景のもと、依然として増加傾向にあるシェア居住の実態を把握し、具体的な空間形式を挙げて住宅の提案をおこない、シェアハウスのひとつのモデルとして提示する。

3 研究の構成

I 研究計画では、シェア居住に着目するに至った背景から、本研究の目的と構成を示す。II シェア居住、シェア住居の実情では、シェア居住をめぐる現在の状況を理解し、現在普及しているシェアハウスの大半を占めるリノベーション型のシェアハウスの問題点から、シェアハウスというビルディング・タイプについて考察する。III 「SHAREyaraicho」実態調査では、建築家が最初からシェア居住を目的として計画した、新築のシェアハウスにおける調査をおこない、シェア居住の実態や空間構成を把握し、現代におけるシェアハウスのあり方を探る。IV 一室空間性をもつ空間の分析では、II、IIIで明らかとなったシェア居住の実態、シェアハウスの空間構成から、あたらしいシェアハウスのあり方として一室空間性をもつ空間の可能性に着目し、事例を参照しながら一室空間性をつくり出している空間の要素の分析をおこなう。そして、V ケーススタディでは、II からIVにおける調査・分析をもとに、実際の敷地におけるシェアハウスを計画し、一室空間性が可能とする、これまでとは異なるあたらしいシェア居住のあり方を提示する。

II シェア居住とシェア住居の実情

1 シェア居住をめぐる現況

シェア居住とは、「家族ではない、複数の居住者が台所などを共用して一つの家に住む形態」(小林ら 2007) のことをさし、90年代半ばに一般に浸透し始め、2000年頃からテレビドラマや雑誌の特集でシェア居住が取り上げられるようになったことをきっかけに、住まい方のあたらしい選択肢として広く認知されるようになった。

海外でのシェア居住経験者の増加やインターネットの発達、非婚化や晩婚化などの社会の動向を受けて、シェア居住は急激に増加していった。

近年のシェア居住の動向として、共同で住むことで得られるものを重視する傾向があり、当初は経済的な理由や単身居住では得られない空間的な豊かさを求めてシェア居住が選択されていたが、近年では共に暮らすことの楽しさが評価され、シェア居住がコミュニティの良さを見直すきっかけとして機能していることがわかる。

2 シェアハウスというビルディング・タイプ

シェア住居には、住宅形式や住まい方、賃貸契約方法などによって、ルームシェアや

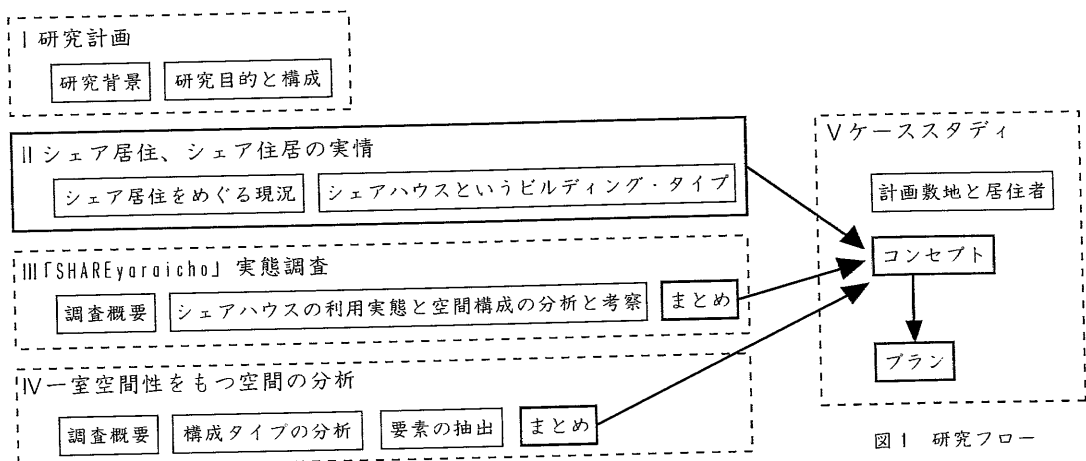


図1 研究フロー

ゲストハウス、シェアハウス、ミングルなど、さまざまなタイプが存在するが、本研究では一つの建物に複数の人が住まうシェアハウスを研究対象とする。現在普及しているシェアハウスは、民家やマンション、寮であった建物を改築したものが大半を占め、新築のシェアハウスとして建てられた例はまだ少ない。

寮やマンションを改築した、居住者が多くて30人以上にもなる大規模なシェアハウスは、1階に共用部があり、階段室と廊下を通過してそれぞれの個室にアクセスするというように、個室が確保されていることが前提条件としてあり、普通の集合住宅と変わらないプランをしている。また、民家を改築した10人以下の小規模なシェアハウスにおいても、広い共用部と人数分の個室があることを条件としていることが多い。実際に、増加している居室タイプの多くは個室タイプである。

また、最近のシェアハウスでは、図書スペースやフィットネス設備などを設けて共用部を充実させたり、カフェ風やアトリエ風など、さまざまなコンセプトのもとに共用部をデザインしたりして、各自の個室の確保と同時に、共用部の充実度、快適性を重視したものが増加してきている。

しかし、共用部に付与する機能や、デザインに変化をつけることでさまざまな種類のシェアハウスが展開されているが、根本的な空間構成のされ方は「専用」と「共用」という認識のもとでおこなわれており、プランの計画のされ方は似たようなものがほとんどである。そうした空間構成の仕方や、似たり寄ったりのプランによって、一見多

様にみえるシェアハウスでも、その中でおこなわれている「シェア居住」という住まい方自体は画一化されている。

そこで、シェアハウスを新築する意味がでてくるのである。「専用」と「共用」という認識のもとで構成され、住まい方の画一化を生んでいるリノベーション型のシェアハウスとは違い、はじめからシェア居住を目的とした住居を提案することで、多様化する社会の要請に応える、あたらしいシェア居住のあり方を導き出せるのではないだろうか。また、シェアハウスと集合住宅で大きく違うのは、「住む人を選ぶ」ということである。誰でも住めるということではないのである。まわりにどんな人が住んでいるかわからないということが多い集合住宅とは違い、共にひとつの家のなかで暮らし、住民同士お互いの顔が見え、「どのような人が住むのか」が問われるところにシェア居住のあたらしいあり方の可能性がある。

III 「SHAREyaraicho」実態調査

1 調査概要 (i) 調査の目的

建築家がはじめからシェアハウスとして設計した新築のシェアハウスにおける調査をおこない、空間構成やそこでのシェア居住の実態を把握する。

調査をおこなうにあたり、2つのことを目的とする。第一に、居住者同士の関わり合いだけでなく、他者の介在や周辺地域との関わり合いのあり方を明らかにすることで、シェアハウスを成立させる要因を探る。第二に、「専用」と「共用」という認識以外に、どのような認識のもとで空間を使い分けているかを明らかにすることで、現代に

おけるシェアハウスの空間構成のあり方を探る。これらのことを目的として、アンケート調査とヒアリング調査をおこなった。

(ii) 調査対象

SHAREyaraicho は、東京都新宿区の住宅街に建つ、7人が住まうシェアハウスである。シェアハウスにおいてはコミュニティが外部に開かれていて、外部を内包するような空間をもっていることが重要であると考え、1階には作業場を設け、外の人が入ってきやすい状況をつくっている。生活することが外部に対して生産したり、発信したりするような空間となることを意図して SHAREyaraicho はつくられている。

SHAREyaraicho	
設計者：	篠原聡子+内村綾乃
所在地：	東京都新宿区
敷地面積：	128.6 m ²
階数：	地上3階
建築面積：	76.7 m ²
構造：	鉄骨造
延床面積：	184.3 m ²
竣工年：	2012年

表1 「SHAREyaraicho」概要

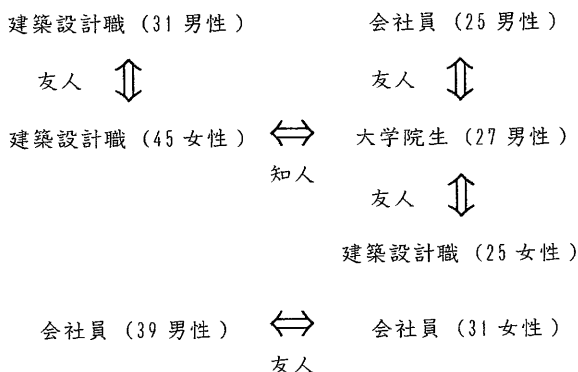


図2 「SHAREyaraicho」居住者構成

2 シェアハウスの利用形態と

空間構成の分析と考察 (i) 外部の介在

シェアハウスにてときたまおこなわれるイベントが、他者との交流を広めるだけでなく、居住者間の関係性を形成することに大きく役立っていることがわかった。外部の

介入が居住者間の仲を深めるきっかけとなり、共同体としてのまとまりを生んでいる。また、外部の介入が普段とは異なる空間の使い方を発見するきっかけとなっていることがわかった。SHAREyaraichoにおいて、イベント時によく利用されるのが3階の広間とキッチンである。普段はキッチン台付近で立ちながら食事を済ませるか、広間のテーブルで座りながら食事を済ませており、キッチンと広間の2ヶ所にのみ居場所が分かれている。しかし、イベント時にはキッチンから広間まで一体的に広く使われ、お互いの距離感や親密度の違いだけでなく、時間の経過、気分や雰囲気に合わせてそれぞれの居場所がいくつか存在している。

1階の作業場から見えるコモンテラスは、一見気軽に行けそうな場所であるが、個人の部屋であるスペース3を通らなければ行けない場所であるため、「行けそうで行けない場所」「使い道がよくわからない」「普段は入れない」という認識が居住者のなかにある。しかし、オープンルームやイベント時にはコモンテラスも多くの人が集まる居場所のひとつとなり SHAREyaraicho にとってはなくてはならない場所となっている。

コモンテラスのように、普段は使い道がわからないような場所でも、多くの人が集まったときにはひとつの居場所として必要とされる場所となるのである。多くの外部が介入するシェアハウスにおいて、その空間に柔軟性をもたせることは重要なことである。さらに、余白を多く残しておくことでひとりひとりの気分や雰囲気、時間の経過に合わせてそれぞれに心地よい居場所を見つけ、選択できるように、多くの居場所が

用意されている、発見的な空間であることがシェアハウスにおいて重要であることがわかった。

(ii) 空間の使い分け

個室以外で、居住者が居心地が良いと感じる場所についての調査をおこなったところ、ルーフテラスと広間+キッチンの二つに回答が分かれた。広間+キッチンに関しては、天井高が高く、南北に全面開口が設けられ空間を広く感じさせる工夫がされており、明るく開放的な空間となっている。開放感がある場所が居心地が良い場所として挙げられているが、そこでおこなわれる行為、それぞれの場所に関してどのような認識をもっているかについての調査に対する回答をみると、それぞれの場所がどのように使い分けられているかが明らかとなった。

広間+キッチンにおいては、料理をする、人と話すなど、「みんな」でおこなう行為があげられた。居心地が良い理由としても「人が集まれるから」「人がいるから」と答えている。このことより、居住者は広間+キッチンに対して「楽しい場所」「みんなで話す場所」という認識をもっており、普段から交流の場として活用していることがわかる。反対に、ルーフテラスにおいては空を見上げてぼんやりしたり、たばこを吸ったりなど、基本的に「ひとり」でおこなう行為があげられた。居住者はルーフテラスに対して「気分転換する場所」「気持ち良い場所」という認識をもっており、シェア居住において個室以外にも「ひとり」となる場所が必要であることがわかる。

このように SHAREyaraicho においては「専用」と「共用」という認識以外に、「みんな」と「ひとり」という認識をもって空間を使い分けていることがわかった。

な」と「ひとり」という認識をもって空間を使い分けていることがわかった。

3 まとめ

SHAREyaraicho は一般的なシェアハウス同様、「共用」部とそれぞれの個室の「専用」部から構成されているが、そのほかにも「みんな」という場所や「ひとり」でいる場所、多くの人が集まる時にはあらゆる人の心地よい場所となるような場所が織り交ぜられ、空間全体においてさまざまな性質をもった居場所の選択肢が多く用意されている。そういった選択性を内包した空間が、シェア居住という住まい方をより多様化させる可能性をもっている。

また、SHAREyaraicho は居住者に住みこなしを要求するような空間をつくり出していることが一般的なシェアハウスとは大きく異なる点である。そのために、次に挙げるような建築的な工夫がされている。

◇個室の特性

第一に、それぞれの個室に特性をもたせるということである。

一般的なシェアハウスにおいてはそれぞれの個室の広さや形状、まわりの環境にさほど差はなく、「平等」につくられている。しかし、SHAREyaraicho においては、広い部屋や細長い部屋、歪な形をした部屋など、それぞれに形が異なる。また、全ての部屋が必ず共用部に面している。

SHAREyaraicho においては、個室がとなり合う空間とどう関係しているか、そこにどのような人が住むのが重要であることがわかる。このように、あえて「不均質」な

空間を生み、それぞれの個室にそれぞれの特性をもたせることで、「どのような人が住むのか」が問われるシェア居住という住まい方に対して応えているのである。

◇外を意識した空間

第二に、生活を内部のみで完結させていないということである。

シェアハウス自体の認知度は高くとも、やはりそこでおこなわれている生活に対する認識は未だ低い。普通の住宅街の中では家族でもない人たちの共同生活は好奇の対象となりやすい。不安と好奇は表裏一体なのである。SHAREyaraichoは、こうした他者の視線や関心の侵入を前提としてつくられている。それには町工場をイメージしてつくられた、内外があいまいな空間と、内外をやわらかく境界づけている一枚のうすい皮膜が重要な役割を果たしている。

外部とを隔てる半透明のテント地の、中の様子がぼんやり透けて見えるうすさと、それが出入りや換気のためにしばしばめくれたままになっている、そのちらりと内部が覗く三角形の隙間が外部を引き込む要素となっている。同時に、そこから音楽やしゃべり声、作業をしている様子など、あらゆる生活の様子が外部へもれ出し、うすい皮膜の向こうの作業場が外部へ発信する場となっている。

他者の視線や関心といった、周辺地域の大きなコミュニティがシェアハウスという小さなコミュニティを成立させているといえる。そして、周辺の環境をも取り込んだ、常に外を意識させる社会性の高い空間をシェアハウス内に設けることで、シェアハウ

スの中だけではおさまらない、より広範囲における自分と他者との距離感や関係性を意識した暮らしがおこなわれるのではないだろうか。

IV 一室空間性をもつ空間の分析

1 調査概要 (i) 調査背景

II、IIIでシェア居住に関してみてきた。その中で、シェア居住のあり方として多様化する社会の要請にどのように応えるか、ということが重要であることがわかった。そのことに対して、空間でどのように応えることができるかが本研究のテーマである。そこで、着目したのが一室空間性である。一室空間性をもつ住宅の歴史をみていくと、その出現には大きく分けて3つの時期がある。一つ目は、ミース・ファン・デル・ローエやル・コルビュジェらの住宅が代表的な、モダニズム運動が起きた1930年頃のヨーロッパである。二つ目は、池辺陽や清家清、増沢洵らの狭小住宅が代表的な、第二次世界大戦後1950年頃の日本である。そして、三つ目が2000年以降から現代に至るまでの日本である。

これまで住宅設計における主たる対象であった核家族の解体が進み、家族形態は多様化し、もはや固定的な家族像は存在しない。そうした社会状況のなか、度々現われてきたのが一室空間性である。それは、一室空間性をもつ空間が、混沌とした社会状況やそれに伴って多様化するライフスタイルを許容する力がある空間であると同時に、人と人との距離感や関係性といった複雑で不可視な要素をつくる空間のルールやあいまいさをつくる手法を実践する場となっているからであると考えられる。

こうした性質をもつ一室空間性を、シェア居住とむすびつけることで、あたらしいシェア居住のあり方を見出せるのではないだろうか。

(ii) 調査目的と調査対象

建築家の設計による住宅作品事例の記事、図面の読み取り分析をおこない、シェアハウスに応用可能な一室空間性をつくりだす設計手法、空間要素を抽出する。

「新建築 住宅特集」2000年1月号から2012年4月号までに掲載された、建築家の設計による住宅作品の図面と記事の内容から、一室空間性をもつと思われる作品143事例を調査対象とした。

今回調査対象とした事例は、家族を対象として計画された住宅であるが、親子関係や配偶関係など、血縁関係があるにせよ、家族を構成する人員は、根源的には一個人である。そのため、血縁関係のない他人同士が住まうシェアハウスの計画に対しても、家族を対象として計画された住宅の空間構成手法や要素における調査、分析の結果は応用可能であると考えられる。

2 構成タイプの分析

一室空間性がみられる144事例を、空間構成の仕方タイプ別に4つに分類した。平面的な構成方法と、断面的な構成方法の2系統がみられた。

3 要素の抽出

空間構成の仕方によって、大まかな空間の分節・連続がおこなわれているが、床の仕上げ素材に変化をつけたり、柱を配置したり、細かな要素で空間を完全に室化することなく分節がおこなわれている。反対に、壁などで隔てられた空間同士を連続させてひとつながりの空間とする要素もみられた。分節する手法として7種、連続させる手法として3種、計10種の手法が抽出できた。

空間を分節する手法	
01 床・天井：凹凸をつける	床面や天井面に抑揚をつけることで空間を分節する手法。実質的な距離がとれないときに抑揚をつけることで意識的な距離がとれる。
02 床・天井：仕上げ素材の切替	床面や天井面の仕上げ素材に変化をつけることで空間を分節する手法。
03 明暗	明るい場所と暗い場所と、明暗に差をつけることで空間を分節する手法。明暗にグラデーションをつけることで空間に方向性が生まれる。
04 柱	柱を配置することで空間を分節する手法。反対に、柱をなくすことで空間の自由度をあげている事例がみられ、柱に空間を分節する力があることがわかる。
05 ヴォリューム：形状を変化させる	ヴォリューム自体を折り曲げたり、角度をつけたりすることで空間を分節する手法。狭い場所や広い場所など、身体的に変化する空間が生まれる。
06 ヴォリューム：ズラす	ヴォリュームをズラしながら配置することで空間を分節する手法。前後にズラせば、直線的につながった空間に、角度をふりながらズラせば平面的に広がった空間となる。
07 ヴォリューム：挿入する	ヴォリュームを挿入することで空間を分節する手法。実質的な距離をとることができ、外部空間を挿入すればどの空間に対しても採光や通風が容易となる。

表3 空間を分節する手法

平面的 構成方法	断面的 構成方法
01 ワンルーム型 間仕切りが少なく、全体が一体となった空間構成。方向性、中心性が曖昧で、各部屋ごとの方角による不平等性がない。	03 スキップ型 「階」と感じられない程度の高さの異なる床をつなげ、立体的に点在する場がゆるやかにつながった空間構成。
02 コア型 コアとなる要素が配置された、中心性の高い空間構成。コアをヴォイドとして配置するか層として配置するかで空間の特性が変わる。	04 吹抜け型 吹抜けを介して全体がつながる空間構成。吹き抜けを中心に、パブリックからプライベートへのゆるやかな領域分けがある。

表2 一室空間性をもつ空間の構成タイプ

空間を連続させる手法	
01 室内窓	壁で仕切られていても、室内窓をあけることで全体をゆるやかにつなぐ手法。開閉可能であれば、自身でとなり合う空間との間合いを調整できる。
02 仕上げ素材の統一	床面や天井面などの仕上げ素材を統一することで連続した空間であることを示す手法。
03 隙間	ズレによって生じた隙間や、壁の隙間によって空間をつなげる手法。

表4 空間を連続させる手法

4 まとめ

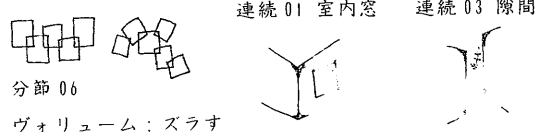
◇身体的つながりと視覚的つながり

となり合う空間同士が「つながっている」と認識する空間同士の関係には2種類ある。一つ目は、移動可能であると判断される、身体的つながりをもった空間同士の関係である。二つ目は、隙間や開口をとおしてとなりの空間が見える、視覚的つながりをもった空間同士の関係である。

抽出した10の要素のうち、7つの要素は身体的つながりをもった空間の関係をつくり、そのほかの3つの要素は視覚的つながりをもった空間の関係をつくっている。さらに、身体的つながりをつくり出している要素は低い/高い、狭い/広いなどといった、身体的な変化を与えることで境界を操作している要素と、素材や暗い/明るいなどといった、視覚的な変化を与えることで境界を操作している要素とにわけられる。

身体的つながりをつくり出す要素と、視覚的つながりをつくり出す要素を同時に取り入れることで境界を明確にしたり、反対にあいまいにしたりしている。さらに、「見えてはいるけれど、直接行くことはできない」という、視覚的つながりと身体的つながりが一致しない、複雑な空間同士の関係が生み出されている。

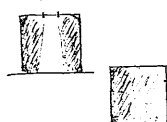
視覚的つながり



身体的つながり

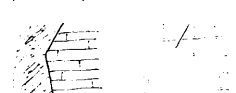
視覚的变化

分節04 明暗



分節02/連続02

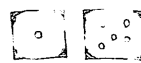
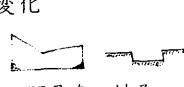
仕上げ素材の切替/統一



身体的変化

分節01

床・天井：凹凸をつける



分節03 柱

分節05

ヴォリューム：形状を変化させる

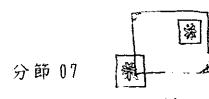
分節07
ヴォリューム：挿入する

図3 空間分節・連続の手法の系統

◇一室空間性のもつ可能性

構成タイプや手法をさまざまに組み合わせられてつくられる一室空間性をもつ空間のなかには、つながりつつも距離感をもった多様な「居場所」がつけられている。しかし、その居場所は最初から使われ方が要請された明確な「居場所」として用意されているわけではなく、そこから自立した「居場所」となりそうな場所として用意されている。つまり、一室空間性をもつ住宅は、空間全体を住む場所として等価に捉え、そこでおこなわれる行為や人との距離感を調整しながら、私的領域である「居場所」を自ら探し出すことができる、発見的で多様性に満ちた空間なのである。

居場所となりうる場所がさまざまな場所に存在する、選択性と多様性のある空間が求められているシェアハウスにおいて、一室空間性はそれらを物理的にコントロールす

るのではなく、居住者自らが距離感や関係性を模索しながら、「専用」と「共用」という認識を超えた、私的な領域づくりがおこなえる、居住者が主体となった住まい方を可能とする。

V ケーススタディ

1 コンセプト

◇あいだの関係

他人が集まって一つの家に住むという、多様性に満ちた住まい方を受け入れる空間のあり方として、一室空間性をもつ空間は可能性をもっていることが、本研究で明らかとなった。

「他人と集まって住む」ということが、より豊かなものとなるには、お互いの距離感の取り方が重要である。個室と共用部から構成されている従来のシェアハウスでは、個室に入ってしまうと全体から完全に遮断されてしまい、反対に、個室を出してしまうとすぐに全体のなかに埋もれてしまう。人との関係がONとOFFの両極端しかなく、ひとりだけでいながら全体を感じられる、もしくは全体のなかにいながらひとりだけでいられるという、中間の関係性がない。

そういったあいまいな中間の関係性をつくり出しているのが一室空間性をもった空間である。そしてそれは、壁やその場に与えられた機能で物理的にコントロールされているわけではない。

まるで公園のなかで自分の心地よい場所を見つけ、そこで好きな行為をおこなうように、一室空間性をもつ空間は、人の活動を規定することなく、自らが心地よいと感じる人との距離感や関係性を模索しながら自

分の居場所を見つけ出せる、地形的な空間であるともいえる。他人の行為が風景として立ち現われたり、日常生活のなかで「偶然」見つける風景や居場所を内包した発見的な空間である。

そうした空間が、現代の複雑化した人と人との距離感や関係性を見直すきっかけとなり、シェア居住がコミュニティのあり方を再認識させる住まい方として確立する。

◇居住者が主体となる住まい

個人化が進み、ライフスタイルが多様化するなかで、住まい方のひとつの選択肢としてあらたに誕生したのが「シェア居住」である。

しかし、多様化する社会の要請に対する応えとしてのシェア居住においては、平等に与えられた環境のなかではその住まい方は一様なものになってしまう。あえて不平等な環境を与え、居住者それぞれに住みこなしを要求することで、シェア居住のあたらしいあり方を導き出せる。

流動的な住まい方であるシェア居住において、居住者が変われば違う住みこなしがおこなわれ、またあたらしい空間として立ち現われる。住みながら空間は更新されていき、ひとつつながりとなった空間においてはそれが全体に淡く影響し合って、シェアハウスは新陳代謝していく。

居住者が主体となった住まい方を可能とするためには、あらゆる行為を誘発する、さまざまな特性をもった場を内包している不均質な空間であると同時に、あらゆる住みこなしの変化にも対応しうる柔軟な空間である必要がある。

◇「外」を意識した空間

普通の集合住宅とは違い、居住者に住みこなしを要求することで、「どのような人が住むのか」を問うことがシェア居住において重要であるが、その、「どのような人が住むのか」ということは外に対しても同様である。

シェアハウスという小さなコミュニティが都市という大きなコミュニティのなかにおいてどのようなまとまりとして存在しているかを明らかにしてくれるのがまさに「外」の存在なのではないだろうか。シェアハウス内だけでおさまっては見えてこないまとまりが、「外」の存在によって見えてくる。そうした「外」をシェアハウス内に取り入れ、常に「外」を意識した空間とすることで、「個」のまとまりであることを再認識させ、より広範囲における自分と他者との距離感や関係性を見つめなおすことができる。

2 居住者と計画地

居住者は、シェア居住増加の中心にいる、20～30代の若者6人を想定する。

原宿の神宮前3丁目、キャットストリートを歩いてくると真正面に大きな桜の木が現われる。住宅と店舗が入り混じる一画を敷地として選定し、多様なライフスタイルを受け入れて、コミュニティのあり方を再認識させる住まい方を内包する住宅を、シェアハウスのケーススタディとして計画する。

1967年に暗渠化された渋谷川の上に作られた遊歩道がキャットストリートであるが、この敷地はその川の流れが分岐した地点をなぞるような形をしている。その形状から、渋谷方面から表参道を横切って店舗が立ち並ぶキャットストリートの終着点という印象を与え、この場所を境に店舗の数は減り、街の雰囲気は一変する。

原宿という常に若者であふれ、流動的な街と、多様性に満ちたシェアハウスが合わさって相乗効果を生むことを期待する。

所在	東京都渋谷区神宮前三丁目
地域地区	第一種中高層住居専用地域 第二種高度地区 最高限：20m 準防火地域
敷地面積	213.2 m ²
許容建蔽率	60%
許容容積率	200%

表5 計画地概要



図4 計画敷地図



図5 計画地写真